

平成 31 年度研究プロジェクト研究活動報告

研究種別	■自主研究 10	公益目的事業 17
主査名	庭田文近 城西大学現代政策学部准教授	
研究テーマ	包括的富における交通インフラ整備の基礎的研究Ⅱ	
研究の目的： 本研究では、昨年度から我が国の地域ごとの“包括的富”の評価について検討している。 包括的富とは、2012 年に開催された国連の持続可能な開発会議（リオ+20 サミット）で提唱された持続可能性を踏まえた真の豊かさを捉える新たな指標であり、地方創生が叫ばれている現在において、東京および地方ごとにその包括的富を評価し、地域間でそれを比較検討することは重要であると考えられる。 昨年度は、その基礎として、包括的富指標（IWI）の理論および方法について整理を行うとともに、特に生態系に関する経済評価について検討を行ってきた。 今年度は、昨年度に引き続き包括的富指標の理論・方法について議論を深めるとともに、特に包括的富における自然資本と交通資本の評価事例をより多く収集・検討を加え、実際の地域を設定して試算する。そして、昨年度から課題となっている包括的富指標と地域成長モデルの統合を試みる。その際には、昨今の大規模災害の多発を踏まえ、国土強靱性や防災、災害復興に関しても議論していく。		
研究の経過（4 月～3 月）： 包括的富指標を構成する要素の 1 つである環境資本の経済評価について、昨年度より引き続き Nick Hanley and Edward B. Barbier (2009) Pricing Nature: Cost-Benefit Analysis and Environmental Policy, Edward Elgar Publishing の第 9 章「Valuing ecosystem services」を精読し、生態系の経済評価について、農林漁業の持続可能性を踏まえて議論を行ってきた。特に前期特は、研究メンバーの朝日ちさと氏と萩原清子氏が昨年度の日本地域学会で報告した「地域における資本の測度と地域間人口移動」をもとに、包括的富指標と地域成長モデルの統合について議論を行ってきた。また、後期は、地域防災と包括的富の関係について、政治学・行政学を専門とする飯塚智規氏を中心に検討を行った。		
研究の成果（自己評価含む）： Nick Hanley and Edward B. Barbier (2009) Pricing Nature: Cost-Benefit Analysis and Environmental Policy, Edward Elgar Publishing を第 9 章まで全訳した。包括的富における環境価値の捉え方・評価法については、メンバー間で理解を深めたため、樋口清秀氏の執筆により「包括的富における自然資本」を成果報告書（A シリーズ）に収める。また、交通インフラを含む国土強靱化や地域防災と包括的富に関する議論をもとに、飯塚智規氏の執筆により「地区防災計画制度と地域社会の包括的富」も成果報告書（A シリーズ）に収める。		
今後の課題： 包括的富指標と地域成長モデルの統合について議論を深めることはできたが、実際の地域（地方区分）についての包括的富指標の計測を行うことができなかった。		